

Ⅱ 研究をふり返って

—保育者とともに深めあった保育実践研究

*詳細な履歴・業績は本学紀要「総合科学」(2020.12)に掲載されます。

○1955年鹿児島県種子島生まれ。中央大学文学部(1978年)を卒業し、東京学芸大学大学院教育学研究科(1980年)を修了。修士論文は「教育行政における住民自治原理と教育委員会制度」でした。学校教育ではなく社会教育ベースの教育学が出発点でした。恩師の島田修一先生(中央大学)・小林文人先生(東京学芸大学)には、現場を大事にする姿勢をたたき込まれました。

國學院大学幼児教育専門学校が初任校(1982年)です。幼児教育・保育学分野に足を踏み入れ保育政策・保育者養成を研究テーマとしていました。

○熊本短大保育科に赴任(1988年)してから本格的に保育学を研究領域としました。当時、要領・指針が改訂され保育現場の大きな課題になっていました。その中心理念であった「子ども中心主義の実践的検討」を研究テーマに据えました。

また熊本保育問題研究会を設立(1989年)し、全国保育問題研究協議会や九州保育団体合同研究集会そして全国保育団体合同研究集会に加わり民間保育研究団体を研究基盤としました。同時に教育学の応用としての幼児教育学に決別し「保育学」を専門分野として名乗る決意をしました。

実践科学としての保育学は発達研究抜きでは成立しません。発達心理学の神田英雄氏の研究を拠り所としました。発達研究(育ち)と指導論(手だて)を両軸にした保育学(保育実践研究)を志しました。その成果として『『荒れる子』『キレル子』と保育・子育て』(2000年)を出版しました。保育実践研究は保育者の悩みから出発します。第1部が当時現場の課題であった「荒れる子」「キレル子」問題、第2部が「子どもの育ちと保育の手だてをつなぐ」という発達研究に学んだ成果です。はじめての単著でしたが、大きな反響がありました。

○学園大学社会福祉学部に移動（2000年）してからは、保育と社会福祉の接点としての「子ども家庭福祉論」にまで広げました。主な研究テーマは3つ。1つは「発達に弱さを抱えた子」研究です。「荒れる子」「キレル子」の発展研究です。保育現場の重要な課題の一つです。第一に発達障害の子どもたちへの療育的なアプローチではなく、発達に弱さを抱えた子と周りの子どもたちとの関係づくりという保育実践固有の課題への対応です。第二に障害に加え虐待や貧困など「育ちに困難を抱えた子ども」を含んだ保育のあり方として「おおらかにかまえて安心感を育てる保育」を提起しました。

2つは「保護者との関係づくり」研究です。これも保育現場の新たな悩みでした。「子どものために」だけでなく「親も子も」支える保育を提起しました。この2つは、『『子どもを真ん中に』を疑う—これからの保育と子ども家庭福祉』（2014年かもがわ出版）として2冊目の単著として出版しました。タイトルが過激すぎたのか「荒れる子」「キレル子」程の反響はありませんでした。

3つめは積み残した課題です。異年齢保育（過疎地含む）の研究です。私自身の保育論の集大成です。保育は、生活と切り離されて意図的に教え育てる「教育」よりも、大人の暮らしの傍らで見よう見まねで育ち合う「形成」概念で捉え直すことが求められているのではないか。保育を学校モデルではなく家庭モデルの「暮らしの保育」という視点で構築することを課題としています。退職（2020年）後も引き続き研究していきます。

○一貫して保育者から学ぶ研究スタイルでした。「実践なき理論は空虚」、現場と理論研究をつなぐツールとして実践記録分析を研究手法としてきました。現場に通うだけでなく、毎日食事をするように実践記録を読みました。同時に実践記録を書いてもらうために短大保育科の卒業生の古庄範子さんと『保育に生かす実践記録』（2006年かもがわ出版）を出版しました。「場面記録」は現場でも活用されました。

○振り返ってみるといくつかの特徴があったような気がします。第一に「保育者に育てられた保育研究者」。保育問題研究会など民間の保育研究運動

団体が研究の基盤でした。第二に「実践記録の分析が主な研究スタイル」でした。第三に学術研究ではなく保育者へのメッセージとしての「保育実践研究」でした。第四に教育学を振り出しに発達心理学（発達研究）社会福祉学（子ども家庭福祉論）を取り込みながら保育研究を深めてきました。第五に保育研究の集大成として異年齢保育論（暮らしの保育論）の構築を積み残してしまいました。退職（2020年3月）後に出版を目指します。